

発表題目：別れの作られ方  
モザンビーク・ロムウェ母系制社会における離婚訴訟から

所属： 新潟大学大学院現代社会文化研究科博士後期課程

氏名： 田村 優

1200 字程度で発表内容を記載してください。

人が婚姻による「つながり」を断ち、パートナーとの間に「へだたり」を設けるまでに、どのようなプロセスを経るのだろうか。本報告ではモザンビーク・ロムウェ社会の離婚訴訟を事例に妻が夫との離婚を決意するまでのプロセスを取り上げ、そこから母系制社会における婚姻のあり方について考えてみたい。

母系制社会は一般的に離婚率が高いと言われ、離婚が容易にできる理由として、母系親族間の社会的基盤の強さ [杉山 1996]、再婚の容易さや夫婦は一生添い遂げるべきという規範の欠如 [山田 2013] が指摘されてきた。ロムウェ社会も先行研究により離婚・再婚の容易さが指摘されており、とりわけフェミニスト社会学者のアフレッドは、マクア＝ロムウェ（ロムウェが属する語族）の女性は一夫多妻に反対する中で離婚を積極的に活用してきたとして、離婚を女性の「伝統的な権利」と捉えている [Arnfred 2011: 99]。

本報告の調査地であるザンベジア州リオマ村でも離婚率は高く、インタビュー調査を行った婚姻歴を有する 18 歳以上の女性 62 人のうち約 4 割が離婚経験を持ち、その殆どが 1 年以内に再婚していた。しかし、調査から見てきたのは、先行研究とは裏腹に、離婚という人生選択について繰り返し思い悩む人びとの姿であった。多くの女性は夫婦関係の修復を望みながらも、離別に至っていたのである。

本報告では、裁判所での離婚訴訟を事例に、妻が夫との別れを検討しはじめてから実際に離婚に至るまでのプロセスを追う。離婚訴訟というと離婚そのものや財産分与、養育費等の請求についての争いが想定されるが、リオマ村では夫婦カウンセリングのようなものとして扱われる。このカウンセリング（訴訟）期間中に心変わりをし、離別を選択する女性が多いのである。では訴訟中に何が起きているのだろうか。

事例を見ていくと、特に初めの頃は夫婦の愛情と関係修復に向けた期待が強調される。そこには、先行研究から浮かび上がってくるような清々しい女性の姿はなく、むしろ未練がましい姿が見えてくる。不倫し出て行った夫が更生し戻ってくるまで何度も判決を先延ばしする妻もおり、夫との交渉が繰り返される。しかし、親族が交渉に巻き込まれることで徐々に夫婦の結びつきを強調するような語りが少なくなり、夫／妻としての経済社会的な役割期待とその裏切りに関する語りが多くなっていく。つまり、訴訟を通じ親族の「つながり」が再確認されると同時に、夫婦間に「へだたり」が設けられ、別れが作られていく様子が窺えるのだ。

本報告では、このようなリオマ村における「別れの作られ方」を具体的に提示しながら、母系制社会において理念とされる婚姻とは何かを考察する試みである。

#### 参考文献

杉山祐子 1996 「離婚したって大丈夫——ファーム化の進展による生活の変化とベンバ女性の現在」 和田正平編『アフリカ女性の民族誌』明石書店 pp. 83-114.

山田直子 2013 「ミナンカバウ母系制村落社会における婚姻と家族——ナガリ・ティゴ・コト村住民のライフヒストリーから」『比較家族史研究』27: 27-52.

Arnfred, S. 2011. *Sexuality and Gender Politics in Mozambique: Rethinking Gender in Africa*. James Currey.